



百鬼園

戰前・戰中

日記

上

内田百閒



慶應義塾大学出版会

百鬼園  
戰前・戰中日記  
上  
目次

凡例

昭和十一年一月—十二月

昭和十二年一月—十二月

昭和十三年一月—十二月

昭和十四年一月—十二月

昭和十五年一月—六月

349

247

163

73

7

5

百鬼園 戰前・戰中日記 下 目次

凡例

昭和十五年七月—十二月

昭和十六年一月—十二月

昭和十七年（缺）

昭和十八年一月—十二月

昭和十九年一月—十月

昭和十七年〔参考資料・平山三郎 写本 一月一日—四月二十二日〕

解題 岡山県郷土文化財団 万城あき  
索引兼注

編集  
佐藤聖  
岡山県郷土文化財団

## 凡例

- 一 『百鬼園 戰前・戰中日記』は、岡山県郷土文化財団所蔵の昭和十一年から昭和十五年、及び昭和十八年の「文藝手帖」、昭和十六年の「三省堂手帖」、昭和十九年の「日本郵船株式会社手帖」を底本とした。昭和十七年の手帖は現存しないが、平山三郎氏による一月一日から四月二十二日までの翻刻原稿を末尾に参考資料として収録した。
- 二 手帖の表記は、カタカナ表記の横書であるが、ひらがな表記にあらため、縦書とした。原則として正字体・旧かな遣いとした。また、句読点を適宜加え、難読字には適宜ルビを振った。明らかな誤記は訂正した。
- 三 日付けは手帖に印刷されていた算用数字を漢数字にあらためた。
- 四 「手帖」には、見開き頁の右最下段に「MEMO」欄があり、百閒はその欄を独立して活用している。
- 五 俳句で『新輯 内田百閒全集第十八卷』収録の「俳句全作品季題別總覽」と異同があるものは「〔 〕」に注記した。
- 六 本文中の編集上の注記は「〔 〕」に入れ、新字体・現代仮名遣いで本文よりも小さな文字で示した。
- 七 本文中に、今日の人権意識に照らして不適切と思われる語句や表現があるが、時代的背景と、作品の歴史的価値にかんがみ、加えて著者が故人であることから、底本のままとした。

昭和十一年〔文藝手帖〕

昭和十一年一月

一月一日 水

無爲。ひるね。夕、多田、大井來。酒をのむ。

一月二日 木

午後から、岡山市方言集稿本の續稿の爲カードの整理。なほ一二三日かかるつもり也。

一月三日 金

午後から方言集のカード整理。栗村、木村來。夕方前に去る。夜も方言集。

一月四日 土

午後、前田良平來。夕、谷中來。方言集はかどらず。

一月五日 日

終日、方言集カードの整理。大分はかどる。夕飯に一昨日京都の中島から送つて來た鹿を食つた。

一月六日 月

午後、今村みそざいを届けて來た。從前と二羽になつた。小鳥全部で三十四羽也。朝、内山來。

寺田さんの告別式に代理をたのむ。終日、夕食後も方言集の整理。カードの整理終る。夜、村山來。

一月七日 火

例年の子供達との會食のため、先日京都の中島のくれた鹿の肉とは別に鶏肉とを持つて小日向に行き遅い午食。出〔出<sup>いで</sup>隆〕も加はる。夕方まで續き後で出と將棋をさして夜八時過歸る。

一月八日 水

夕、朝日の七階の日本鳥類研究所の談話會に行く筈だつたのをやめて、終日無爲。夕、大井その會に行くつもりで誘ひに來たが、そのまま夕食。内山來、岩瀬來。

一月九日 木

無爲。午、北村來。夕、東炎の應募原稿を讀む。中野來。酒をのみ、おとなしく歸る。

一月十日 金

朝より熱あり。腹痛甚しく下痢。八度五分を下らず夜半に至る。

一月十一日 土

おなか止まり熱七度五分。夕方から熱なほ下がつたらし。夕、金子安正來。會はなかつた。床中、

宮城の今度の本の校正と東炎の應募原稿とを見た。

一月十二日 日

熱下がつた。村山、竹崎（航研卒業生）玄關迄來。午後、竹内來。宮城の今度の本を「騒音」と云ふ名にきめた。夜騒音の原稿（ゲラ刷り）校訂。

一月十三日 月

昭和十一年一月

一日宮城の本の校訂。午後、改造、文藝の記者來。

一月十四日 火

宮城の騒音の校訂。

一月十五日 水

午、奥脇來。午後、航研松村來。小西來。今村來。清水清兵衛満洲より來（玄關迄）。夕、栗村來。夕食、大井來。その間に騒音校訂。

一月十六日 木

ひる前、内山來。午後、竹内來。夕、内山來。夕、宮城夫婦來。後で三笠書房に行つて又来る。

宮城の騒音の序文の爲也。騒音の校訂を終る。

一月十七日 金

無爲。今年からお精進の日をしようと思ふ。今日は觀音様、母、こひのお父さんの日にて精進。

一月十八日 土

無爲。午後、内山來。夕、内山來。出隆來。將棋をさした。

一月十九日 日

無爲。午前内山來。午後今村來。夕、内山歸り来る。

一月二十日 月

夕、中野來。一緒に酒をのんでゐたら清水清兵衛來た。

一月二十一日 火

無爲。去年以來風呂に行き散髪。金矢歸つて居た。一緒に酒。

一月二十二日 水

無爲。夕より内山來り共に宮城へよばれて行つた。るすに黒須來りし。

一月二十三日 木

無爲。午後、東日に行き、辻に會つてサンデー毎日の小説の約束をした。朝日に寄り美土路氏に多美野の事を頼んだ。

(丸の内車中) うららかや石垣にさす松の影

一月二十四日 金

サンデー毎日に書かうと思ふ小説の腹案成る。夕、食事中に大井來。一しょに飲む。

一月二十五日 土

雪。サンデー毎日の小説を少し書きかけた。

一月二十六日 日

午後、東炎の高橋櫨染子來。内山來。無爲。

一月二十七日 月

午後、大井來。頬白をくれた。續稿。夕、多田來、太田來、中野來。みんな一緒に酒をのむ。

一月二十八日 火

午後、名古屋新聞大島來。これから毎週日曜書く事になつた。森田七郎來。今村來。かやくぐり

三番落鳥。

昭和十一年一月

一月二十九日 水

午後、奥脇來。夕、平野來。夜、續稿。

一月三十日 木

午後、内山を呼ぶ。三笠書房の使来る。續稿。

一月三十一日 金

午後、内山來。多田來。金矢來。一緒に夕食。名古屋新聞の原稿かいた。「鶲の咽喉」。

二月一日 土

午後、多田來、大井來。三笠書房の使來。夕、又多田來、すぐ歸る。續稿抄らず。

二月二日 日

朝、今村が蟲を持つて來た外、何人も來らず。續稿抄る。

二月三日 月

續稿。夕、多田來。一緒に晩飯。

二月四日 火

續稿終る。題未定。三五枚。午後から大雪。

二月五日 水

午後、原稿推敲。文題、鬼の冥福。東日へ持つて行き、七十五圓受取つて歸る。多田待つてゐた。

夕飯。

二月六日 木

午後、今村こがらを持つて來た。無爲。

二月七日 金

昭和十一年二月

午、中央公論の松下來。午後、名古屋新聞の原稿を書いた。

二月八日 土 昨夜寝られなかつた。無爲。小鳥籠の棚を綜合飼桶のやうな設計にしようと思つて案をたてた。

二月九日 日 午後、野上氏を訪ぶ。夕方歸り、一日無爲。

二月十日 月

午、北村來。多美野、唐助卒業につき、必要の金百五十圓の調達をたのんだ。夕方より「旅」の原稿書き始めた。

二月十一日 火

午後、今村來。三笠書房の使小川來。大井來。原稿が忙しいのに晝中何も出来なかつた。夕食後一寸寝て夜二時過迄に「旅」の原稿、飛行機漫筆、十枚書き終つた。

二月十二日 水

午後より書き始め、夕食後一ねむりして又續け、徹夜して朝五時に「寺田寅彦博士の追憶」十枚を中央公論の爲にかいた。夕、中央公論の松下來。

二月十三日 木

徹夜のあとで一日うつらうつら。夕、太田と多田來。一緒に夕食。

二月十四日 金

午後、名古屋新聞の原稿「馬丁」三枚半書いた。

二月十五日 土

午後、時事新報の原稿書き始む。「東支」三枚。夕、栗村、木村來、夕食。

二月十六日 日

夕方少し仕事。早く寝る。

二月十七日 月

朝、珍らしく早く八時前に起きた。午後より仕事。時事の原稿。大井來。夕方迄待たして、續稿して夕食。但、今日は精進料理なり。

二月十八日 火

午後、時事續稿、終る。「鱗鱗の記」十七枚。時事に持つて行つて原稿料五十一圓貰つて來た。午後、三笠書房の使、續百鬼園日記帖の出版届の印を取りに來た。放送局の吉川留守に來りし由。

二月十九日 水

ひる前、竹内來。床中に在りて會はず。午後、竹内來。多田來。何となく氣分重し。

二月二十日 木

午、小鳥二十三籠を入れる飼桶棚が出來て來た。午後、内山來。無爲。續百鬼園日記帖出來て來た。夕、多田來、夕食。

二月二十一日 金

午過、明朗の原稿「誕生日」五枚、使をまたせて書いた。午後、すぐ續いて名古屋新聞の「續阿房の鳥飼」四枚書いた。それから野上さんを訪うて夕方歸る。

二月二十二日 土

夕方前、佐藤春夫訪問。たみの、唐助の卒業につき、月謝等の清算に要する百五十圓の相談をして協力を得た。版畫莊にて佐藤氏の印稅を先借りする事になつた。

二月二十三日 日

又大雪也。夕方より週刊朝日の原稿書き始む。書いてしまつた「むらさき」十枚半。

二月二十四日 月

ひる前「むらさき」を読み返してすぐに偕樂園の放送局の和樂放送研究會へ行く。銀座の版畫莊に寄る。主人不在。明日行く事を約す。朝日に寄りむらさきの稿料の内20受取る。佐藤春夫を訪ぶ。小日向に行く。正月以來也。歸つたら北村來。今度中公の「有頂天」の裝幀を北村にやらせる事にした。

二月二十五日 火

午後、三笠書房へ行き、それから版畫莊へ行き、佐藤春夫氏の印稅七十圓を借りた。それを小日向に持つて行つてやり、歸つて待つてゐた多田と三崎町の帝國書院に守屋氏を誘つたが既に自笑軒に出かけた後で、すぐに自笑軒へ行き、野上、守屋、多田と會食。歸りに多田立寄る。

二月二十六日 水

午、北村、たみの、唐助の卒業の金の事につき來てくれた。その時、軍人謀反の噂を傳ふ。

二月二十七日 木

午後、多田來る。歸つた後夕方、一寸佐藤春夫氏を訪ぶ。

二月二十八日 金

午後、散髪に行つた。夕、今村來。軍人の反亂今日に至りてなほ靜まらぬらしい。

二月二十九日 土

午後、久吉肺炎にて重態の電報來。すぐに行かうと思つても戒嚴令により交通停止で自動車がなくてぢりぢりした。やつと乗つて行つた。出を訪ふ。夕方歸つて出なほして小林博士をたのみ一緒に行診して貰つた。歸つてねたら一時半。反亂鎮定せり。

昭和十一年三月

三月一日 日

午後、久吉を見舞ふ。少しよし。歸つて見たら、小西、大井、奥脇來て待つてゐた。一緒に夕食。

三月二日 月

午後、久吉を見舞ふ。出を訪うて歸る。夕、都新聞の上山來（二十九日の留守に來た原稿の用件）。夜、都新聞の原稿「雪明」第一回三枚半書いた。

三月三日 火

午後、久吉を見舞ふ。出に寄る。佐藤春夫に寄る。

三月四日 水

午後、都新聞の第二回脱稿。内山來。多田來。多田と夕食。村山來。都新聞の第一回を書く。

三月五日 木

午後、都新聞續稿二回書き終る。都新聞に持つて行き稿料を受取り、歸りに朝日へ廻る。内山來。

三月六日 金

午後、名古屋新聞の原稿、今古を書いた。

三月七日 土

午後、小西來。無爲。續日記帖寄贈本の内二十四冊の署名をした。

三月八日 日

無爲。又雪。もとの學生迎某が多田に託した百鬼園隨筆、同續篇に俳句を書いてやる。續篇の分、學校騒動をさまりて

泥水にあぶくの數や春の風

三月九日 月

無爲。午後、内山來。

三月十日 火

無爲。午後、多田來。

三月十一日 水

午後、東日にて辻を訪ふ。高原とも會ふ。行きがけに小川町川崎第百銀行にて十圓の小切手を受け取つた。午、内山來。夕、多田來。久吉の看護婦を歸す金を借りて來てくれた。内山來、託す。

三月十二日 木

朝、一寸動悸が打つた。それから又寝た。午後、小鳥のうちの保護鳥の餌養許可の爲神樂坂警察署へ行つた。佐藤春夫に廻る。會へなかつたので朝日に行つて赤井氏にたみのの事を頼んだ。蘭茶に會つて歸る。

三月十三日 金

午後、東日、辻來。名古屋新聞の原稿「謝肉祭」を書いた。初めての春雨、暖かし。

三月十四日 土

午後、朝日へ行き、赤井氏に會つてたみのの事につき美土路氏の返事を聞く。馱目らしい。中央公論に雨宮氏を訪ぶ。一寸席にゐないと云ふので、東京驛の風呂に這入つた。風呂は何十日振り也。中央公論に歸り、雨宮に會つてたみのの事をたのむ。夜、桐明を訪ひて十五圓借りた。一緒に行つて外にまたしておいた。こひに渡す炭屋が癪にさはつたからである。

三月十五日 日

午後、村山來。夕、大井來。食事。平野來。亦一緒に食事。

三月十六日 月

朝、野上氏來たけれど、まだ寝てゐたので歸つた。午、北村來。日々に寄稿する「新道の飛行機事故」を書いた。夜、松浦嘉一、月末倫敦に行く挨拶に來た。

三月十七日 火

(以下二十五日記) 朝、出「出隆」來。久吉の重態を傳ぶ。午過、一緒に出て出の帳場の自動車にて小林さんを頼みに行く。小林さんは夕方七時半に來る事になつたので小日向へ行き、久吉を診る。惡し。出に行き、歸つて枕頭に坐つて二こと三こと話した(起こして貰はないで落ちついて寝てゐたのか、えらいね、と私が云つた)。間もなく死んだ。一旦歸る。金矢、平井來。中野來。金矢、平井に先に行つて貰ふ。多田、北村來。中野に先に行つて貰ふ。多田は、お金の工面の爲出かけた。北村と小日向へ行く。午前三時歸る。

三月十八日 水